

広島県立美術館

# 研究紀要

第19号

南薫造の《津波》について .....	角田 新	1
ブータンの工芸調査ノート .....	福田 浩子	9

2016

BULLETIN  
OF  
HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM

No.19

On "Tsunami" by Kunzo Minami <b>KAKUDA, Arata</b>	<i>1</i>
Research Note of Art Craft in Bhutan <b>FUKUDA SIDDIQI, Hiroko</b>	<i>9</i>

2016

HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM  
HIROSHIMA JAPAN

## 南薫造の《津波》について

角 田 新

南薫造(みなみ くんぞう 1883(明治16)年7月21日-1950(昭和25)年1月6日)は、広島県賀茂郡内海村(現呉市安浦町)出身の画家。東京美術学校西洋画科を卒業し、1907年~1910年にかけて、イギリス、フランスを中心に遊学。文展、帝展、新文展、日展で活躍し、1932年から43年にかけては東京美術学校の教授を務めた。油彩画家、水彩画家として知られ、また版画の制作でも知られている。晩年は郷里の安浦町で暮らし、他界するまで瀬戸内の風景を中心に創作活動を続けた。

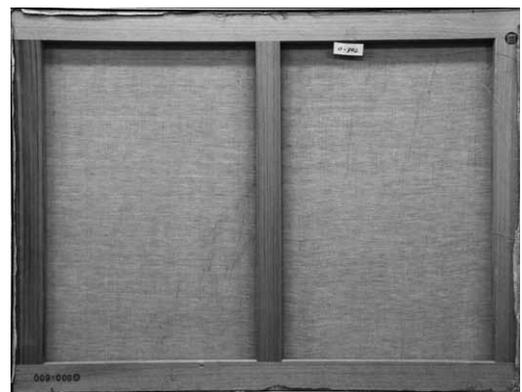
その南に《津波》と題された作品がある。法量は600×800ミリ(P25号)。キャンバスに油彩で描かれており、画面左右方向に数条の亀裂が走っている。作品背面の画布に鉛筆で「津波」と書かれているようだ。ようだというのは、その文字の大部分が木枠に隠れているためだ。この木枠は既製品だが当時のものではなく、比較的新しく高品位なものであることから、めぐりで保存されていた作品が、当館に収蔵される際、木枠へ張り込まれたものと考えられる。この文字も見えている部分から「津波」と想像しているだけで、この2文字のみなのか、もっと多くの文字が隠れているのかは、木枠を外さないと確認できない。しかし、作品へのリスクを考えると簡単に剥がすことはできないため、筆跡も南本人の手によるものか判断できない。つまり、この作品が当館へ収蔵された際、他に情報が無いためこの文字を作品名にしたものと考えられ、そのことは妥当な判断だったと思われるが、この文字が作者の付けた作品名であるとは限らないとも考えられるのである。



アトリエで寛ぐ南薫造



南薫造《津波》



《津波》裏面



木枠に隠れた「津波」の文字

なぜそのことをここで確認しているかといえば、この作品、画面を見ると確かに津波とおぼしき高波が迫っている。しかし、画面左下に描かれた人物たちからは、迫り来る波を前にした緊張感が全く感じられない。むしろ楽しみに待っているかのようでさえある。このことについては以前から「この絵は本当に津波を描いたものなのか？」と鑑賞者から疑問の声が寄せられることもあり、私たちも気にしていた。確かに、この作品に描かれた情景を表現するのに津波という言葉当てることには、何か違和感がある。



津波を前にのんびりとしている人々。  
中には堤防の外に出ている人も。

そうしたことを考えていると、そもそも南は津波を体験したことがあったのだろうか？ そして《津波》という作品名を付けたのは（作品背面に「津波」と書いたのは）、本当に南なのだろうか？ など、さまざまな疑問がわいてくる。そして、もしもこの作品に描かれているのが津波でないのだとしたら、南は一体どこで何を見たのだろうか？



戸外で制作に励む南薫造

描かれた情景を上手く説明できるようなシチュエーションが想像できない。想像だけで描くことの少ない南のスタイルからいって、この情景そのものではなかったとしても、少なくともきっかけとなる光景は何処かで目にしていることが想像される。しかし津波である。知識としては知ってはいても、滅多に体験するものではない。そこでまず南が津波を体験した可能性を考えてみた。

例えば関東大震災の津波はどうだろう。あるいは、津波でなく台風の影響による高波だったらどうだろう。南は関東大震災の被害状況や桜島の噴火による被災状況をスケッチに残しており、災害による被害を視覚的に記録することに、ある種、画家としての責任とでもいった感覚を持っていたことが感じられる。しかし、

それらのスケッチからは、状況が落ち着いてからの取材であることが読み取れる。また、日頃から自らの行動に十分な安全マージンを確保する傾向にある南の人物柄からも、台風や地震の最中、敢えて危険な場所へスケッチに出かけるといった、二次災害につながりかねない行動をとるとは考えにくい。では、新聞の記事や写真などを参考に後日描いたという可能性はどうだろうか。しかし想像であるならなおさら、画面に描かれた人物たちの緊張感のなさに違和感を覚える。



南薫造《震災風景》

この絵に描かれた情景が合理的に説明できないと展示も難しくなるなど考えていた、そんな折、南米のアマゾン川に、ポロロッカと呼ばれる河川逆流現象があることを知った。ポロロッカは海嘯と呼ばれる現象の代表的な例とされ、地形と潮汐との相乗効果によって、河川に海水が逆流する現象をさし、アマゾン川流域で使われるトゥピー語で「大騒音」という意味だという。その逆流する潮の波は、大潮の日には高さ5メートルもの垂直の壁となり、凄まじい音を轟かせながらアマゾン川を800キロも遡る。あまりにも激しいため、定期的にかかることが判っていても被害を避けることが出来ない一方で、その周期性から風物詩として「楽しむ」人々も存在する。<sup>\*1</sup>

このポロロッカの映像を見た時は、これで《津波》の説明が付くと考えたのだがそう簡単にはいかなかった。南は多くの日記やスケッチを残しているので、人生の節目となるような見聞については、それらの資料を検証することで、比較的多くのことを確認できる作家だが、そうした資料を検証するまでもなく南が南米に出掛けたという事実はない。そこで、海嘯の発生する川が他にないか調べてみた。その結果、大きな海嘯の発生する川は世界中でもほんの数カ所に絞り込めることが判った。まずアマゾン川、そしてイギリスのセヴァーン川。最後に中国の銭塘江である。描かれた雰囲気からいえば銭塘江に絞って検証すれば良さそうにも思われるが、イギリスに2年以上も滞在した南の場合、セヴァーン川を描いた可能性も検証しておく必要があるだろう。

セヴァーン川はイギリスで最も長い川として知られている。ウエールズのカンブリア山地近くから始まり、イングランド西部を縦断する形で南に進みブリストル海峡に注いでいる。このセヴァーン川での逆流が、南の作品に描かれたくらいの大波になるのは川幅の狭まるグロスタシャーのミンスターワース周辺だという。ミンスターワースまでは、ロンドンから列車で約3時間。しかもロンドンとミンスターワースの中間地点には南がスケッチのために滞在していたモルトン村(オックスフォードシャー Moreton)があり、足を伸ばすことは十分可能と思われる。少なくとも不可能な距離ではない。しかし、現在知られている資料の中に、南がグロスター周辺まで足を伸ばしたことを示す資料はない。またセヴァーン川の逆流が高波になるのは、先述の通り川幅が狭くなるからであり、資料で確認する限り、南の作品に描かれているような高さの波が発生する地域の川幅は、作品に描かれた川よりもかなり狭く、岸辺の植物相も異なっているようである。従ってこの作品が、セヴァーン川を描いたものだとすることにも無理があるよう

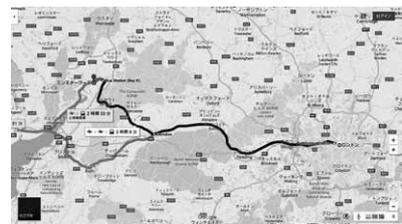


Fig.1 ロンドンからミンスターワースへ

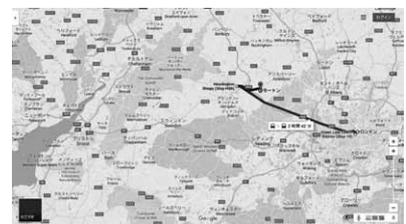


Fig.2 ロンドンからモルトンへ



Fig.3 モルトンからミンスターワースへ



Fig.4 現在のセヴァーン川で逆流を楽しむ人々



Fig.5 現在の銭塘江で「観潮」を楽しむ人々

わっていた。池大雅の《西湖春景銭塘観潮図》\*<sup>2</sup>に描かれていることから判るように、江戸時代には日本でも広く知られていたと考えることができる。銭塘江周辺で逆流を楽しむ習慣は観潮と呼ばれるが、この観潮のために世界中から観光客が集まり、現在でも毎年この絵に描かれているような情景を目にすることができる。

それでは南は銭塘江を見たことがあったのだろうか。調べてみると、一度だけ銭塘江をスケッチした記録がある。従軍画家として中国大陸を旅した時のことだ。1939(昭和14)年、上海に上陸して数日を過ごした後、杭州へ移動。4月13日(旧暦では2月24日)の午後から18日までの6日間を浙江省の西湖畔にあった新々旅館(New Hotel)に投宿している。

新々旅館は現在も杭州ザ・ニューホテル(杭州新新飯店)として残っている。1922年に建築され、杭州で最も歴史のあるホテルとして多くの旅行者を魅了してきた。現在は省の文物保護建築群の一つに指定され、宋美齡、魯迅、茅盾、陳布雷、汪道涵なども泊まったという格式の高いホテルだ。

南の従軍日記によると、南らは、この新々旅館に到着した直後、名所巡りに出かけるという団体が用意したトラックに便乗しているのだが、そのトラックが最初に向かったのが銭塘江に架かる銭塘江大橋\*<sup>3</sup>だった。対岸には中国側のトーチカが築かれ、「橋を進むと発砲される」と注意されるなど落ち着かない場所だったが、ここでしばらくの間鉛筆スケッチをしたことが南の日記に記されている。しかし、肝心の海嘯についての記述はない。ま

に感じる。

それでは銭塘江の可能性はどうだろうか。先にも述べた通り描かれている人物の服装などを勘案すれば、この風景画の取材地には中国の銭塘江が一番しっくり来る。

しかも、この地域では逆流を見物して楽しむ習慣が千年以上も前から引き継がれており、その知識は蘇軾の漢詩などを通して日本にも伝



Fig.6 池大雅の《西湖春景銭塘観潮図》(右隻)



Fig.7 新新飯店のある西湖周辺



Fig.8 杭州駅から新新飯店へ

た、この日以降は西湖周辺のスケッチに始終し、銭塘江まで出かけたという記述は見あたらない。そこでこの最初の日に南が海嘯を見ていた可能性を検討してみる。この日の海嘯の到達時間については記録が見つからなかったが計算でおおよその時間を知ることはできる。銭塘江の潮汐表に当てはめると、この日は旧暦の2月24日なので、16時±40分が海嘯の到達時刻とわかる(参考とした観潮用潮汐表<sup>\*4</sup>は観潮地点やその日の気候による変動を考慮して、計算結果に幅が持たせてある)。

これを踏まえて南の旅を追ってみよう。南が杭州駅に到着したのが14時30分頃で西湖まではバスで移動。これは約20分の距離だが、団体と同行となっているので約30分を見込む。チェックイン後、トラックでの移動は団体とはいえ20分程度と考えられるから、銭塘江到着は16時前後。潮の時間には間に合った可能性が高い。



Fig.9 新新飯店から銭塘江大橋へ

そこで気になるのが、なぜこの団体は第一の見学先に銭塘江大橋を選んだのかということである。この橋を挟んで日本軍と中国軍がにらみ合っているという意味では、事実上の最前線だったから、これを見学に行ったと考えられなくもない。しかし、トラックが廻った名所は、この銭塘江大橋を除けば全て西湖周辺の社寺仏閣など日本人にもなじみのある観光名所ばかりである。そうした目で見れば、一般の団体客を案内しているトラックが最初にわざわざこの橋まで出かけた理由は海嘯の時間に合わせたからこそではなかったかとも想像される。ただ、先述の潮汐表によるとこの日は新月でも満月でもなく中潮の時期で、海嘯の遡上を目にすることができたとしても、それほど大きな波ではなかったと思われる。しかし、銭塘江の海嘯は当時から既に観光資源であり、西湖周辺では過去の大波の写真などが様々な施設で掲出されていたという。波は小さくとも海嘯を目にしていたなら、銭塘江から帰ってのち、南もこうした写真でイメージを補完した可能性はある。

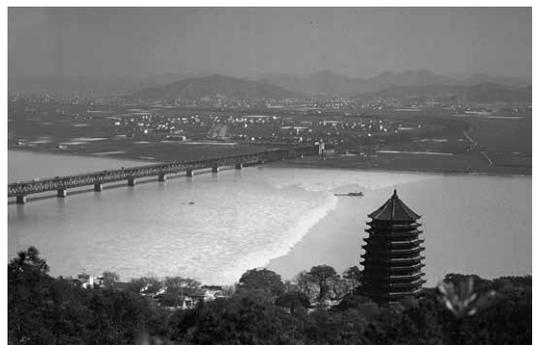


Fig.10 銭塘江大橋を通過してさらに遡る海嘯



Fig.11 南が銭塘江を訪れたその日、海嘯を目にしたとすれば、このくらいの波であったろうか。

また、南の従軍日記には従軍中、南の世話をしてくれた将校のスケッチブック<sup>\*5</sup>を見せてもらった際、そこに記されていた漢詩を気に入って書き写した話が出てくる。そうしたエピソードからも

南の漢詩に対する造詣の深さが伺え、蘇軾の詩であれば当然知っていたことが想像される。そして、そのことは同時に、蘇軾が「八月十八潮壯觀天下無」とうたって以来、漢字文化圏では広く知られた海嘯<sup>\*6</sup>について、南も当然知っていたことが推測されるのである。

さて、この作品に描かれているのが海嘯であれば、描かれた情景の説明としてはスッキリするのだが、私は冒頭で、この作品に描かれた情景に《津波》という作品名はそぐわないと書いた。では、この作品が錢塘江の海嘯を描いたものであるとしたら、作品名についても違和感なく説明できるだろうか。

海嘯という言葉調べてみると、昭和初期までは地震による津波も海嘯と呼ばれていたという記述を見付けた。現在では特異な自然現象を示す専門用語として確立している「海嘯」だが、広辞苑で調べると潮津波とひらかれており、更に漢字源ではただ津波とされている。また、「小田原大海嘯（1902年）」のように台風による高潮にも海嘯と言う言葉が使われていることなどを考え合わせると、南の活躍時期であれば、「津波」と「海嘯」とは、現在ほど明確な区別なく使用されていたものと推測され、南自身が海嘯を津波と表現しても不思議ではなかったことが理解できた。

推測と想像を重ねた追跡ではあったが、今回の調査を通して、この作品の背景が少しずつでも明らかになっていると手応えを感じた。今後は鑑賞者に対してもこの作品について、こうした周辺情報も含め、よりきめ細かな紹介ができるようになって考えている。

一方、今後の課題として、南同様、中国へ従軍して錢塘江を描いた作家がいないか、作品は残っていないのか。更に南と同時代に於いて、錢塘江の逆流がどの程度知られていたのか、あるいは現在よりも良く知られていた可能性も含め、情報を集め、作品と、作品が描かれた時代について、さらに明らかにしていきたい。

(かくだあらた／当館主任学芸員)

\*1 近年では波の到来が正確に予測できることから、サーフィンを楽しむ人さえ存在する。

\*2 西湖春景錢塘觀潮図（重要文化財）池大雅（いけのたいが）筆

紙本淡彩 6曲1双（各）166.5×371.0cm

江戸時代・18世紀 東京国立博物館蔵

\*3 この橋は中国人技術者が初めて設計した本格的な大型鉄橋として有名で、現在でも現役の重要橋梁だが、当時は軍事的な意味で重要視され、一部破壊されていたが、この橋を挟んで日本軍と中国軍が対峙していた。

\*4 中国 杭州市観光ホームページ

\*5 石割少佐のスケッチ帳 晁補之《大孤山祠》。

広島県立美術館研究紀要第8号 2005年 南薫造『従軍日記』藤崎 綾

\*6 年間を通じて最大の波が発生するとされる旧暦の8月19日（十五夜の日）、杭州では満月にちなんで月餅を食べながら観潮する風習があるというほど一般的に知られている。

- \* fig. 1-3, fig. 7-9はGoogleマップより転載
- \* fig. 4 ウィキペディア日本語サイト「海嘯」解説より
- \* fig. 5 新華網 (新華社電子版)
- \* fig. 6 池大雅《西湖春景錢塘觀潮圖》東京国立博物館画像検索サービス
- \* fig. 10-11 中国国家観光局 (大阪)